

幼児のスポーツ活動における多文化理解

金 田 啓 稔

はじめに

多文化理解の理念の根底には、「相手の立場を認め、尊重すること、すなわち異なったものを理解することが、多文化理解の理念の根底にある」と谷口ら¹⁾は述べている。さらに、「異なること」とは、人種、民族の違い、また、性の違い、身体的能力（障害の有無）の違いなどが含まれるとしている。

幼児の社会的環境は、家庭から地域、保育園・幼稚園へと徐々に広げていく時期にある。この環境が広くなる時期には、幼児にとって家庭とは異なる文化、異なったものと遭遇するということが容易に推察される。そして、異なるものと遭遇し、理解するためには「遊び」の果たす役割は非常に大きいものといえる。ここでいう「遊び」とは、基本的には次のような性質を持つものである。①子どもが喜んで、主体的に取り組む活動である、②自分の意志で中止することができる活動である、③活動の途中で、その内容ややり方を自由に変えられる活動である²⁾。

子どもたちの遊びは、少子化や、遊び場の減少により運動遊びが減少している。運動遊びの減少は、子どもたちの体力低下を生みだし問題とされている。1970年代に早期教育の考え方が拡大し、スポーツ活動も健康増進や身体発達などの利点を強調しつつ盛んに行われている。幼児を対象としたスイミング教室、体操教室などのスポーツ教室が数多く開かれているのである。子どもたちの体力低下に対し、スポーツの効果が注目されるのは当然といえるだろう。特に、幼児期から児童期にかけて調整能が著しい発達をすることは事実である。これらの時期に適切な運動刺激が必要なことについては、藤田ら^{3,4)}、加賀谷⁵⁾、豊田⁶⁾によって報告されている。しかし、これらのス

1) ボニー・ノイゲバウエル編著、谷口正子・斉藤法子訳「幼児のための多文化理解教育」明石書店、1997、pp. 7-10

2) 松田岩男、杉原隆編著「運動心理学入門」大修館書店、1987、pp. 156

ポーツ教室は技術獲得、運動能力の向上が中心課題とされ、幼児が本来経験しなければならないであろう「遊び」の減少に拍車をかけているように思われる。

幼児のスポーツを盛んにした環境の大きな変化として、もう一つ、情報の氾濫が挙げられる。アニメやニュースなどで取り上げられたスポーツが「かっこいいもの」「あこがれ」として子どもたちの間に浸透している。大人と全く同じ道具を使いスポーツとして運動するのである。

また、子どもたちの「遊び」の中にもスポーツが取り入れられている。大人のルールをそのまま使う、形の整ったスポーツとしてではなく、三角ベースや、キーパーとシュート役しかいないサッカーなどである。これらの「遊び」はスポーツではなく「ごっこ遊び」⁷⁾としてとらえられる。

本研究では、幼児のスポーツ、「サッカーごっこ」を取り上げ、幼児のスポーツごっこに対する取り組み方と援助者を含めた仲間との関わりについて事例をもとに検討する。さらに、幼児スポーツ指導及び早期教育の在り方について検討する。

1. 多文化理解

多文化教育 (mulaticultural education) という言葉は、北アメリカや西ヨーロッパその他の地域の多民族国家において一般化してきたものである⁸⁾。多文化教育とは、貧困、偏見、性差別など一般に「社会的弱者」とみられる人々の諸問題に対して重大な関心を払い、その立場や生活に理解を持ち、不遇な条件の克服に努める人間の育成をめざす教育を意味する⁹⁾。

「多文化教育」が意味する多文化は、民族や性など大きな集団を対象としている

3) 藤田厚, 吉本俊明, 深見和男, 近藤明彦, 水落文夫, 鈴木典, 村岡俊郎, 石井政弘: 幼児の適正運動に関する研究—幼児・児童期における選択反応時間の発達的变化からみて—。体育科学14: 91-99, 1987

4) 藤田厚, 吉本俊明, 深見和男, 近藤明彦, 水落文夫, 鈴木典, 村岡俊郎, 石井政弘: 調整機能からみた幼児・児童の体力づくり—選択反応時間と各種測定項目の関係を中心として—。体育科学15: 143-157, 1988

5) 加賀谷聡彦: 小学校体育の立場と少年スポーツ—体力づくりの視点から—。体育の科学36: 798-803, 1986

6) 豊田一成: 発育期と少年スポーツ—少年サッカーについて考える—。体育の科学36: 787-790, 1986

7) 浅見俊雄: 子どもを丈夫に育てる—運動とスポーツのすすめ—体育の科学45: 356-357, 1995

8) 小林哲也・江淵一公編「多文化教育の比較研究」九州大学出版会, 1985, pp. i-vii

9) 小林哲也・江淵一公編, 前掲書, pp. 20

が、本研究での多文化は、幼児の世界が未だ家庭と地域・園が中心であることから、多文化教育が対象とするものより小さな集団を対象として考察する。本論での多文化は、第一次集団と第二次集団の区別を一つの軸とする。幼児の第一次集団とは、最も基本的で身近な小集団である。それは、親しい協力関係を特徴とするような集団である。それに対し、第二次集団は、第一次集団の対概念である。それは特定の目的を達成するためにあるルールや規約に基づいて組織された集団を指す¹⁰⁾。第一次集団には、地域社会や遊び仲間なども入れることができるが、幼児にとって最も身近な小集団である第一次集団は家庭であり、園や地域社会での遊び仲間は第二次集団と考えることができる。

幼児が第一次集団から第二次集団へ移行する時、必ず他者の持つ文化と遭遇することが容易に考えられる。さらに幼児は、日々発達していく存在である。年齢が同じであっても生まれ月に差があれば、発達に差が出現して当然である。また、幼児が育ってきた家庭環境にも個々に差が存在する。つまり、幼児の中には集団に入って遊ぶことができない者や運動能力の劣る者、ルールを理解できない者など様々である。

幼児を対象とした本研究においては、多文化を「多文化教育」として民族、性、経済などを対象として考察するよりも、より小さな対象で考察する方が、幼児が今後出会う多文化の方略 (strategy) を探究できる可能性を秘めていると思われる。

2. 研究の目的と方法

(1) 目的と方法

本研究の目的はスポーツ活動の中で幼児がどのような人間関係（他者への関わり）を見せ、さらにスポーツをどのようにとらえているかを明らかにすることである。さらに早期スポーツ指導の問題点について考察することである。

方法は幼児のスポーツ活動及び会話の内容を参加観察によって本研究の資料とした。さらに、サッカーの時間終了後、参加した保母と面談し、幼児の活動について話し合った。調査は1996年4月から1997年11月の「サッカーの時間」開講日である。対象となる幼児は、T保育園の年長児（5・6歳児）であり、1996年度は男児16名・女児9名、1997年度は、男児8名・女児8名であった。

10) 岡本夏木・高橋恵子・藤永保編、『講座幼児の生活と教育2』『生活と文化』岩波書店、pp. 4-6

(2) 活動内容

サッカーごっこの時間は、月に2回、各1時間行った。活動内容は、前期と後期に分けて考えることができる。(表1参照)前期は4月から9月(8月は休み)、後期は10月から3月である。ボールは園児一人に一個与えられた。

前期は、ボールを蹴ることだけでなく、投げること、転がすことなどボール遊びを楽しむことを重点に置いて援助した。また、サッカーの時間であることから、ドリブル、シュート、ゴールキーパー、ピーケー、ハンド、イエローカード、レッドカードなどの用語も言葉かけの中に多く組み込んだ。

後期は、集団での遊びを重視し、試合形式の活動とした。ルールは、エンドラインからボールが出たときは「ゴールキーパーのボール」とし、サイドラインから出たときは審判のボールということにした。ハンドなど細かなルールは幼児からクレームのない限りすべてとらないこととした。

表1 指導概要

	目的・ねらい	内 容
前 期	ボールに慣れる ボール遊びが好気になる サッカーの時間が好気になる	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールを遠くへ蹴ろう ・ボールを高く蹴ろう ・「ありじごく」へぶつけよう ・ドリブルで探検 ・シュート対決(PK) ・ドリブルで鬼ごっこ
後 期	ルールを守り、協力して遊ぶ 他園の園児との交流	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム作り ・試 合 ・サッカー大会



図1 サッカーの時間の幼児の様子
*B幼稚園のサッカー教室の様子

場所は、保育園の近くの公園を使用した。前期は樹木やあり地獄・ジャングルジム等の固定遊具が多く設置してある公園で行い、後期は、あまり障害物のない公園を使用した。

他園との交流のサッカー大会は、1995年度では34の保育園・幼稚園が参加し、95チーム、1000名の園児が集まった。(表2-1参照) 試合数は、3日間で95試合もあり、かなり大きな大会である。(表2-2, 3, 4参照)

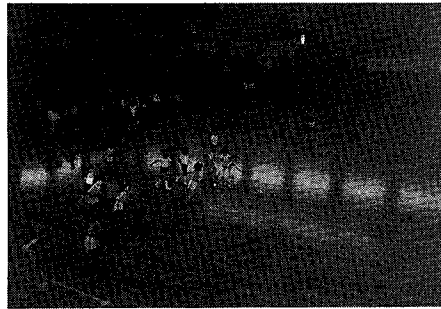


図2 サッカー大会
サッカー大会の様子

表2-1 サッカー大会参加園

大会役員

	11 日	12 日	13 日
会 長	ももの木保育園		
大会委員長	端 山 保 育 園	は な ぶ さ 保 育 園	海 印 寺 保 育 園
副委員長	随 林 寺 保 育 園	せ い し ん 幼 児 園	永 興 保 育 園
審 判 員	京都ジャンピングスクール		
指 揮	大 宅 保 育 園	東 寺 保 育 園	東 福 寺 保 育 園
進 行	小 松 谷 保 育 園	塔 南 保 育 園	大 原 野 保 育 園
救 護	曙 保 育 園	う ぐ い す 保 育 園	真 覚 寺 保 育 園
召 集 ・ 準 備	う ぐ い す 幼 稚 園	上 久 世 保 育 園	華頂短期大学付属幼稚園
	う ぐ い す 第 2 幼 稚 園	下 鳥 羽 保 育 園	吉 祥 院 保 育 園
	永 興 小 金 塚 保 育 園	つ わ ぶ き 園	西 京 極 保 育 園
	春 日 野 園	双 丘 保 育 園	万 因 寺 保 育 園
	上 鳥 羽 保 育 園	六 満 保 育 園	妙 林 苑
	希望の家カトリック保育園		陵 ケ 岡 保 育 園
	ゆ り か ご 保 育 園		

表2-2 サッカー大会プログラム(1日目)

11日の部

曙 ファイターズ	VS	小松谷 エスバルスレッド	大宅 桃太郎	VS	うぐいす幼 ドンキー	永興小金塚 キャプテン	VS	希望の家 アンニョン
春日野 ボンバーマン	VS	大宅 金太郎	随林寺 きたろう	VS	ゆりかご ペガサス	うぐいす第2 ヴェルディ	VS	端山 ガンバ
希望の家 すずらんズ	VS	ももの木 デストロイヤー	曙 チャンピオンズ	VS	永興小金塚 ワッハ	大宅 一休さん	VS	上鳥羽 わんぱくきつず
うぐいす幼 ドラゴンボールZ	VS	随林寺 パーマン	小松谷 メロンヴェルディ	VS	大宅 一寸法師	ゆりかご ドラゴン	VS	春日野 ビートマシーン
大宅 牛若丸	VS	曙 キッカーズ	ももの木 エースコンバット	VS	うぐいす第2 ロックマン			
永興小金塚 ジャンプ	VS	大宅 ヤンチャリカ	端山 ヴェルディ	VS	曙 ファイターズ			
小松谷 エスバルスレッド	VS	うぐいす幼 ドンキー	大宅 桃太郎	VS	希望の家 アンニョン	随林寺 きたろう	VS	大宅 金太郎
大宅 一休さん	VS	ゆりかご ペガサス	ももの木 デストロイヤー	VS	春日野 ボンバーマン	永興小金塚 キャプテン	VS	うぐいす第2 ヴェルディ
上鳥羽 わんぱくきつず	VS	永興小金塚 ワッハ	曙 チャンピオンズ	VS	うぐいす幼 ドラゴンボールZ	大宅 一寸法師	VS	端山 ガンバ
ももの木 エースコンバット	VS	大宅 牛若丸	希望の家 すずらんズ	VS	ゆりかご ドラゴン	春日野 ビートマシーン	VS	小松谷 メロンヴェルディ
永興小金塚 ジャンプ	VS	端山 ヴェルディ	うぐいす第2 ロックマン	VS	大宅 ヤンチャリカ	曙 キッカーズ	VS	随林寺 パーマン

表2-3 サッカー大会プログラム(2日目)

12日の部

六満 デクノ坊	VS	上久世 ビッカーズ	下鳥羽 コンドル	VS	はなぶさ ドラゴン	せいしん ミッキー	VS	東寺 ザ・ファイターズ
つわぶき ゴルドラン	VS	下鳥羽 イーグル	うぐいす ドラゴン	VS	せいしん ミニー	塔南 レイアース	VS	双丘 ももたろう
はなぶさ キャプテン翼	VS	上久世 フラッシュャーズ	六満 のらくろ	VS	下鳥羽 ホークス	せいしん ドナルド	VS	下鳥羽 スワロー
六満 ダン吉	VS	塔南 乱太郎	下鳥羽 ヒバリ	VS	東寺 ザ・グーニーズ	つわぶき ダーク	VS	はなぶさ ライオンキング
双丘 Qたろう	VS	せいしん グーフィー	はなぶさ パワフルキッズ	VS	六満 スジャータ	下鳥羽 ウッドベッカー	VS	うぐいす カービー
せいしん ブルート	VS	はなぶさ ドラゴン	上久世 ビッカーズ	VS	下鳥羽 コンドル			
下鳥羽 イーグル	VS	塔南 レイアース	せいしん ミッキー	VS	六満 デクノ坊			
六満 のらくろ	VS	つわぶき ゴルドラン	東寺 ザ・ファイターズ	VS	双丘 ももたろう	せいしん ミニー	VS	下鳥羽 ホークス
はなぶさ キャプテン翼	VS	うぐいす ドラゴン	せいしん ドナルド	VS	上久世 フラッシュャーズ	下鳥羽 スワロー	VS	六満 ダン吉
せいしん グーフィー	VS	つわぶき ダーク	双丘 Qたろう	VS	下鳥羽 ヒバリ	東寺 ザ・グーニーズ	VS	はなぶさ ライオンキング
下鳥羽 ウッドベッカー	VS	はなぶさ パワフルキッズ	六満 スジャータ	VS	うぐいす カービー	塔南 乱太郎	VS	せいしん ブルート

表2-4 サッカー大会プログラム（3日目）

13日の部

華頂 にんじゃ	VS	吉祥院 ばーぶるさんがー	万因寺 ガンバ	VS	妙林苑 バイオレッツ	陵ヶ岡 ドラゴンガンダム	VS	大原野 ヴェルディさくら
海印寺 ダイナマイツ	VS	西京極 がーぶた-Z・A	永興 ヴェルディ	VS	東福寺 ガンダム	真覚寺 ストロベリー	VS	華頂 わんぱく
妙林苑 スーパーキッズ	VS	大原野 セレッソさくら	華頂 ファイヤーラドン	VS	陵ヶ岡 レイアース	吉祥院 がんばおおさか	VS	万因寺 ウィンダム
陵ヶ岡 ガンバ	VS	真覚寺 ラズベリー	海印寺 ボンバーズ	VS	永興 サッカー	華頂 スーパードラゴン	VS	東福寺 りゅう
大原野 マリノスさくら	VS	万因寺 キャンプター	西京極 がーぶた-Z・J	VS	吉祥院 べるでいー	永興 ディラノザウルス	VS	妙林苑 つばさ
吉祥院 ばーぶるさんがー	VS	永興 ヴェルディ	妙林苑 バイオレッツ	VS	華頂 ダイヤ	万因寺 ドラゴンガンダム	VS	陵ヶ岡 ヴェルディ
万因寺 ガンバ	VS	華頂 にんじゃ	東福寺 ガンダム	VS	陵ヶ岡 ドラゴンガンダム	大原野 ヴェルディさくら	VS	真覚寺 ストロベリー
西京極 がーぶた-Z・A	VS	陵ヶ岡 レイアース	万因寺 ウィンダム	VS	海印寺 ダイナマイツ	華頂 わんぱく	VS	永興 サッカー
東福寺 りゅう	VS	妙林苑 スーパーキッズ	華頂 ファイヤーラドン	VS	大原野 セレッソさくら	陵ヶ岡 ガンバ	VS	吉祥院 がんばおおさか
大原野 マリノスさくら	VS	吉祥院 べるでいー	真覚寺 ラズベリー	VS	万因寺 キャンプター	西京極 がーぶた-Z・J	VS	華頂 スーパードラゴン
華頂 ダイヤ	VS	海印寺 ボンバーズ	陵ヶ岡 ヴェルディ	VS	妙林苑 つばさ	永興 ディラノザウルス	VS	万因寺 ドラゴンガンダム

3. 幼児サッカーごっこにおける記録

事例1（1996, 5）

本時の内容は、①公園でのボールを使った自由遊び、②ボールを高く蹴る、③ドリブルシュート、④1対1のゲームである。

それぞれの課題における幼児の参加率は、①約8割から約4割へ減少、②約5割、③約6割、④約5割であった。

事例2（1996, 5, Oちゃん・女児）

サッカーに参加しない子どもに援助者が「どうしたの」と尋ねると「私サッカー嫌い」という返事がかえってくる。

次の時間「おなか痛い」といって見学する。

事例3（1996, 5, Iくん・男児）

援助者が「自由に遊んでいいよ」というと「なにしてあそんでもいいの」と尋ねてくる。「いいよ」というと「なにしてでもいいの」「ボール蹴ってもいいの」ともう一度

尋ねてくる。もう一度援助者が「いいよ」というと「わーい」といって活動を始める。
しかし、1対1のゲームは途中でリタイアする。

次の時間は足をやけどしていたために見学する。

6月では、5月に見られた確認の行動は見られなくなっている。

事例4 (1997, 5)

「ドリブルをしよう」「ドリブルシュート知ってる？」(援助者)

「蹴って行って、ぽかーんと蹴ること」(Fくん・男児)

「ゴール守る人いるよね」(援助者)

「キーパー」(男児数名)

「キーパーはボール手で触っていいの」(援助者)

「うん、キーパーだけええねん」(男児数名)

次回からは「ドリブルシュートしようか」というとゴールキーパー役とシュート役に分かれてドリブルシュートがはじまる。キーパー役は人気があり、16名中10名がキーパー役になる。キーパーが多すぎてシュートをしなくても入らないので、シュート役全員での攻撃になる。

事例5 (1997, 5)

初夏を感じさせる気温の高い日であった。指導の場所は園の近くにある公園である。指導者はPKを指導しようとしたが、女兒を中心とした7名は公園の周りに咲く草花で花輪を作り始めた。残りの13名は、ゴールキーパー役とシュートする役に分かれてPKを始めた。ここで2つの集団は全く別の遊びを展開しているように思われていたが、花輪を作っている子どもはシュートを決めた子どもに花を1輪プレゼントした。

事例6 (1996, 4)

サッカーをせずに砂遊びをしている園児が数名いる。

事例7 (1997, 5)

1対1のゲームをしてみる。あまり集中できない。

事例8 (1996, 6, Eちゃん・女児)

Eちゃんは課題のドリブルシュートをしようとせず、ボールを持ったまま立っている。話を聞いてみると「わからへん」という。

事例9 (1997, Fくん・男児)

保母の話によると普段よく泣くFくん。身体も小さい。しかし、初回の講座から、ずっとボールを追いかけている。ボールを追いかけているときに何度かこけたが、泣かずにまた立ち上がりボールを追いかける姿が見られた。

11月の教室で最近泣くことが多くなった。「自分のボールをとられた!」といって泣く、転んで泣く等今まで泣かなかったケースでも泣く場面が増えてきた。生活では自己中心的な面が大きく現れているということであった。

事例10 (1997)

10月頃から、4対4の試合をする。運動能力の高いのはGくん、Hくん、Iくんの3名である。Gくん、Hくんは、クラスのリーダー的存在である。試合をするときは、毎時間自分たちで4人組を作るのだが、Gくん、Hくんは必ず同じチームになる。また、回数を重ねるごとにGくん、Hくんのチームに入りたがる子どもが多くなる。

事例11 (1997, 10)

10月末。男児チーム対女児チームで試合をする。女児チームの人数が少なかったために、女児チームへ保母をいれる。試合開始前にGくん、Hくんは「エー!」と少し不満そうな声をあげる。そのまま試合を開始する。その結果、保母の活躍により2対2の同点で終了した。終わってからGくん、Hくんは立ち上がろうとしなかった。保母が話を聞くと、「勝てなかったこと」「保母が相手チームに入ったこと」が嫌だったようである。

事例12 (1997, 11)

試合中、ブランコで母親が赤ちゃんを抱きながらサッカーの様子を観ていた。赤ちゃんの近くにボールが転がったとき審判役の援助者が笛を鳴らし、「赤ちゃんボール」といった。すると、次回からは赤ちゃんがいる、いないに関わらずブランコの方へボールが転がると「赤ちゃんボール」と子どもたちが叫ぶ。

事例13 (1997, 11)

4対4の試合の時、Hくんの強烈なシュートを指導者が足を上げて止めてしまう。不満そうな顔をして座り込んでしまう。休憩時に保育者がGくんとHくんの会話を聞いた。「先生がシュート止めたのかっこよかったな」と話していた。

事例14 (1996, 12, Mくん・男児)

サッカー大会でのMくんの動きがいつもと違う。いつもはボールを自分のゴールから眺め、ボールが出てきたところを蹴るという動きであった。それが、大会の日には常にボールを追いかけている。当日母親と話をしていると、「今日シュート決められたらステーキ食べさせてあげると約束したの」。

4. 幼児が働きかける人とスポーツの関係

1) 幼児とスポーツごっこの関係

幼児の興味は、時間とともに変化する。5月のサッカーの時間では、事例1が示すように、はじめは約8割もあったボール遊びがすぐに変化し始め、サッカーごっこに対する興味は続かない。砂遊びや、あり地獄に興味を引かれ、一人遊びをする幼児が多い。保育者の話では、サッカーの時間を非常に楽しみにしているという。サッカーというスポーツをすることが楽しみであるのか、援助者と関わるのが楽しみであるのかかわからない。事例1は、幼児が楽しみにしている内容によって興味の対象は変化していくことを示している。援助者はサッカーごっこに引き込もうと努力はするが、幼児に強制はしない。砂遊びをしていたとしても援助者は、幼児の活動を認め、サッカーを強制しないので、参加率の低下が顕著に現れたと思われる。つまりサッカーごっこを幼児すべてが楽しいものと感じているわけではないのである。事例2のOちゃんの言葉「私サッカー嫌い」はそれを明確に表している。

高橋は園行事に対する幼児の心境について調査している¹¹⁾。運動会前の様子については1.3%の幼児が嫌がっており、5.3%の幼児が心配していたと報告している。(表3参照) 少数ながらも、運動会に不安を感じている幼児がいるのである。

さらに、事例1, 2, 5, 6より運動遊びをすべての子どもが好んでいるとは限らないことがわかる。特に、精神的・社会的に安定した状態でのみ自発的な身体活動を

11) 高橋司, 園と家庭を繋ぐ保育行事についての一考察, 『佛教大学教育学部論集』第4号: 25-56, 平成4年。

表3 年長児の運動会前の様子

楽しみにしていた	よく話をしていた	嫌がっていた	心配していた	いつもと変化なかった	無回答
56.0	26.7	1.3	5.3	9.3	0.0

*高橋司，園と家庭をつなぐ保育行事についての一考察のデータより作成

伴う運動が認められると考えられる。事例3と9では，不安定な精神状態が，運動場面においてつまずきとなり，安心して活動できないことを示している。保母の話によると，Iくんは普段の生活でも確認の行動が見られるそうである。保育時間外は，ピアノや習字，公文教室などの習い事に多く通っているそうである。幼児を過剰に拘束することは精神的に不安定な状況を生みだし，自発的な活動を阻害する要因となることがわかる。

事例8では，「わからないからできない，やらない」という考え方が5歳児ですでにできあがってしまっているという危険性を含んでいる。「わからへん」という言葉は非常に難しい。課題がわからない場合や今までしたことがないからできないという場合もある。しかし，自由な存在で，自由な活動をするとう一般的に考えられている幼児でさえ，大人が援助者として介入した場合，自由な存在ではなくなってしまう。

スポーツの勝敗に関するこだわりは，1996年度の幼児では6月頃にすでに全体的に勝敗にこだわっているという印象を得ている。しかし，1997年度の幼児では，運動能力の高い2名とリーダー的存在の女兒1名のみにしか6月頃では見られない。事例7が示すようにゲーム形式のものはまだ受け入れられない。10月においても1997年度の幼児は1996年ほどの勝敗へのこだわりは見られない。勝敗へのこだわりは，幼児の人的環境が大きいと思われる。特に身近な両親や兄弟の影響は特に大きいと推察される。

事例14では，母親の幼児への言葉かけがプレーの内容を変化させている。欧米でのジュニアスポーツ指導では，両親はグラウンド内に練習中であろうとも入れないよう指導しているようである。図3は，親の応援の様子であるが，子どもたちよりも親の方が熱心であるように思われる。

事例4が示すように用語について聞いたことのある園児もいる。またその内容も説明することができる。用語についての情報の入手はTVであったり，プロサッカーを見に行った経験からのようである。最初，男児数名のみ理解していたシュートなどの用語の意味が，10月頃には全員が援助者の「ナイスシュート」という言葉かけに目



図3 サッカー大会の応援

を輝かせ喜びを表現する。しかし幼児同士でナイスシュートと言い合うことはない。しかし、事例12が示すように、特定の状況から生まれた言葉については子どもたちにすぐに受け入れられる。

事例5については、この頃の外遊びで花輪づくりを女兒の中で展開していた。サッカーという時間も子どもたちはわかっているのだが、花輪を作れるようになったことがうれしくてそちらの活動へ流れる。全く参加しないのかなと思っていたらシュートを決めた子にプレゼントしていたというサッカーごっこへの参加を見せている。観るスポーツ・するスポーツとスポーツ参加の形態が多様化を見せる中で、幼児にもいろんな形の参加形態がある。

これらをまとめると、以下のようなものである。

1. 幼児の興味関心は刻々と変化する。
2. すべての子どもが運動遊びを好むとは限らない。
3. 精神的・社会的に安定したときに幼児は自発的な運動活動をすることができる。
4. 大人の介入により幼児の遊びは、「遊び」でなくなる可能性が高い。
5. 用語を幼児が用いることはないが、意味理解は十分にできている。またサッカー活動中に生まれた言葉は定着しやすい。

援助者はスポーツごっことしてサッカーを取り扱う意識を強く持っていたが、大人の介入によりそれは実現できなかったと思われる。はじめに「遊び」の性質について、「①子どもが喜んで、主体的に取り組む活動である、②自分の意志で中止することができる活動である、③活動の途中で、その内容ややり方を自由に変えられる活動である」¹²⁾という三つの項目を挙げた。それらを実現できるよう指導者の立場ではなく、援助者としてスポーツごっこに参加したが、大会というスポーツの勝敗を強調する要

因が大きく影響し、幼児の中で遊びではなくスポーツという形で認識された可能性がある。また、目標を持ったことで、それは遊びではなくなってしまったのだろうと推察される。

2) 幼児と仲間（援助者を含む）との関係

事例10より、スポーツの場面においてすべての幼児が運動能力によって仲間を価値付けしているとは言えない。「遊び」としてサッカーをしていたときは運動能力によって集団形成をしていなかった。しかし、試合という勝敗を競う要素が強くなったとき、勝敗にこだわる幼児は、運動能力の高い子どもに集まる傾向にある。実際、半数の幼児が二人のもとへ集まった。4人チームに分かれるよう指示したので、リーダー格のGくんによってチームを決められることとなった。

保母に対しては、事例11が示すように勝敗を意識する幼児はその価値判断を運動能力で行っているようである。GくんとHくんは、大人には勝てないという意識を持っており、自分のまわりの力関係をかなり認識しているように推察される。しかし勝敗を意識していない幼児は「一緒に動けてうれしい」というように感じられる。

援助者に対する幼児の関わり方は、試合が始まると「審判」である。試合の流れをスムーズにするためのボールタッチには不満は出ないが、事例13のような場面では、幼児は援助者に対し、不満をぶつけてくる。ごっこ遊びで役割を演じていないと遊びが壊れるのと同じである。

5. 早期教育についての考察

1980年代に子どもたちのあそびが保育者にとって体育という位置にかえられ始めた。この時期は、子どもたちの体力低下が問題視されている。さらに、自然発生的な運動あそびの減少が、友だち関係の希薄化、運動能力・表現能力の低下を生み出したと考えられている。その結果、大人が介入することによって運動をさせようと発生したのが幼児体育である。

幼児体育の必要性について山本らは「すべての子どもが、自分自身の力で運動のよろこびを獲得していくためには、あそびとは別に意図的・計画的な活動が必要になる」¹³⁾としている。この考え方は、園で体操やサッカーの時間を設けるなど、現在の

12) 松田岩男, 杉原隆編著, 前掲書

13) 山本秀人・脇田順子, だれでもできる・すきになる幼児の運動指導法, 労働旬報社, 1995

幼稚園・保育園の指導の中に多く見られる。

しかし、幼児体育を行うにあたって問題点は多々ある。第一に、「すべての子どもが、運動のよろこびを感じるわけではない」ということが挙げられる。4歳児ですでに運動あそびが好きな幼児と嫌いな幼児がはっきりと分かれている。また、子どもたちの興味は日々、時間によって変化し続ける。いつでもどこでも運動することによってよろこびが得られるわけではない。

第二に、「意図的・計画的な活動に子どもをあてはめることの危険性」が挙げられる。これは、保育者の意図・ねらいが強調されすぎて、子どもたちの自由な発想や展開が阻害される可能性が大きい。佐野は「子どものあそびに親が割り込むことは、子どもから遊びのたのしみを奪うもので、百害あって一利はない」¹⁴⁾と述べている。子どもたちに運動遊びを指導するとき、子どもたちの運動環境を整え、言葉かけすることが保育者の主たる役割となる。しかしその反面、運動する環境を整えすぎることによって、自主的な活動ができなくなる要因となる。さらに、言葉かけの量と質によっては「保育者の顔色をうかがう」子どもも出現する。

第三に、「幼児体育が学校体育の準備教育としてとらえられる危険性」が挙げられる。親は、学校体育で重視されてきた跳び箱が跳べるようになることや、鉄棒ができるようになること、あるいはサッカーの試合遊びで他の子よりも自分の子どもが活躍することを期待している。

第四に、大人たちは運動に対する評価・価値を技術獲得や勝敗に対して重点を置く傾向にある。その評価・価値を幼児の運動に対してもあてはめようとする。さらに、幼児は身体的にも精神的にも未熟である。幼児期のスポーツ指導を「組織化・制度化された運動を卓越性と競争性を追求するというかたちで行わせること」¹⁵⁾ととらえると、それは大人の価値観によるスポーツ指導であり、非常に危険である。

幼児の体力低下の問題については、スポーツ活動によって解消されるように感じられるが、実際は解消されないのではないだろうか。その理由は、幼児の体力低下の要因が、幼児を取り巻く環境の変化であると考えられるからである。すなわち、遊び場の減少や遊び内容の変化、家庭近隣の人間関係の希薄化による運動あそびの減少が大きな要因ではないだろうか。

14) 佐野豪, 3・4・5歳児の運動プログラム, 教育出版, 1983

15) 山本秀人・脇田順子, 前掲書

6. 多文化理解についての考察

幼児に遊びを主眼としたスポーツである「スポーツごっこ」を、多文化教育の留意点と照らし合わせて考察する。

多文化教育の上に立った教育を行う場合、次の5点に留意しなければならないとされている。

- (1) 子どもたちに、自己の文化や価値と同様に、他の文化や価値を尊敬することを教えること。
- (2) すべての子どもたちが多文化・多民族社会の中で自分の存在を認めて学習するのを援助すること。
- (3) 人種主義によって、より影響を受ける子どもたちに積極的に自己概念を持たせること。
- (4) 文化的に異なった人々の相違に関して、人類が類似していることを、積極的な方法によって、子どもたちに経験させることを援助すること。
- (5) 子どもたちに、地域社会全体には特異な存在となっている異なった文化を持つ人々と、ともに仕事をする経験をさせるようにすること¹⁶⁾。

(1)に関連して幼児たちの間では「スポーツごっこ」に参加しようと、参加しなくともどちらも容認しあっている。「スポーツごっこ」に参加している幼児は、参加していない幼児に対して不平不満も言わず、スポーツごっこに熱中している。逆に参加していない幼児は、「スポーツごっこ」を観察し、時折「スポーツごっこ」とは別の形で関わりをみせてくる。二つの集団は不平を言うわけでもなく、それぞれを受け入れている。

しかし、「スポーツごっこ」が遊びでなくなった試合の場面で、大人たちの価値観が入ってくると、参加しない幼児が責められる状況が生まれてくる。「スポーツごっこ」に参加していた幼児はここで初めて参加していない幼児の存在を特別視する。遊びの中では共存できた集団が、勝利という目的意識を持たされたとき目的から外れた集団は排他されるのである。排他された集団は、もう一方の集団の目的意識に気付いたとき、排他されたままではなく、参加を始める姿が見られる。

このことから、幼児の中でも「同化型」の社会が見受けられる。これらを「多文化型」に変化させるためには、スポーツごっこに参加しなければならない指導法ではな

16) 石附実編著、「比較・国際教育学」東信堂、1996、pp. 347

く、応援する参加形式であっても良いのではないだろうか。しかし、(5)の共同の経験から考えると参加することも必要である。しかし、強制や非難されることによる参加ではなく自己の意志によって参加できる言葉かけが重要になってくるであろう。

(2)に関連して、第一次集団での状況は、第二次集団での活動に大きく影響する。つまり幼児が他者あるいは未経験の事柄を受け入れるには、家庭での状況が大きく影響しているのである。今回の研究でも、かなり多くの場面で課題に取り組めない幼児が見受けられた。多文化の環境のもと、自己の存在を明確にできない状態であるときといえるであろう。

ま と め

子どもたちの運動能力の低下が危機感を持って見守られる中、子どもたちを対象とした各種スポーツ教育産業は盛んである。しかし、幼児に対して運動遊びの果たす役割とスポーツ活動での効果では大きな違いがある。その大きな違いは大人の介入によって生み出される。本研究では、サッカーごっこの一員として役になりきることで、大人の介入をなるべく避けるよう指導を行った。そこで明らかになったことは、次の4点である。

1. 幼児の興味関心は刻々と変化する。
2. すべての子どもが運動遊びを好むとは限らない。
3. 精神的・社会的に安定したときに幼児は自発的な運動活動をすることができる。
4. 大人の介入により幼児の遊びは、「遊び」でなくなる可能性が高い。

また、試合を強調した内容になると、勝敗へのこだわりが幼児の中に出てくる。本研究で対象になった園児は、サッカー大会という大きな大会があるために、勝敗へのこだわりが大きくなっているように思われる。援助者と保育者は話し合いの中で「1点取ることを目標とし、勝敗にこだわらないようにしましょう」「子どもたちの親にも徹底しましょう」としているのだが、実際、大会に出てみると子どもたちよりも親の方が熱心に応援している。親の過剰な教育、教育業界の過剰なサービスが、子どもたちの運動遊び、自由遊びを奪っていくのである。

幼児が異なったものへと遭遇したときの「相手の立場を認め、尊重する態度」は、遊びの中から得られるものである。過剰なサービスの中で育つ幼児は、狭い価値観でのみ異なったものを判断し、尊重することはできなくなってしまうと予想される。本研究では、勝敗へのこだわりの姿から考察されるであろう。